特 別 公 演

足の外科治療の最前線
―日常よくある足のトラブルへの対応―

九州医療センター　整形外科・リウマチ科　福 士　純 一

本講演では日常よくある足部および足関節の疾患・外傷について、手術治療を中心とした最新の知見を紹介する。

・足関節捻挫：日常生活やスポーツ活動において日常的に発生する。その多くは内返しの動作で発生し、前距腓靭帯や踵腓靭帯が損傷される。一般に予後は良好で、急性期に手術を行うことはほとんどない。慢性期になっても足関節の不安定性が残っている場合に、靭帯の修復術や再建術が適応される。関節鏡での手技や、人工靭帯を用いた補強術が併用されることもある。

・アキレス腱断裂：走っている時に、「後ろから踵を蹴られた」ような衝撃を感じて発生することが特長である。発生直後は歩行困難となるが、少し時間が立つと歩行可能となり、足関節も不十分ながら自動で動かすことができることが多いため、断裂が見落とされることもある。ギプス固定でも手術とほぼ同程度の良好な治療成績が得られるが、早期回復を希望する場合には手術が選択される。

・外反母趾：足の親指（母趾）が外側を向き、母趾の付け根が内側に突出する足の変形である。母趾の付け根が靴に当たって痛い、第２足趾の底足にタコが出来て痛い、という訴えが多い。原因の一つとして先の細い靴を履くことがあげられる。足趾の体操や装具治療を行うことで、ある程度痛みを軽減できるが、変形を矯正するには手術が適応となる。特に若年性外反母趾は進行が早いため、手術の適応となることが多い。

・扁平足：土踏まずがなくなり、足の内側が地面に接する状態で、中高年の女性に多い。内くるぶしの背側の痛みに加えて、進行すると外くるぶし周囲の痛み、足全体の疲労感などを生じる。縦アーチをつけたインソールにて対応するが、症状改善乏しければ手術の適応となる。長趾屈筋腱の移行、バネ靭帯の修復、踵骨内方移動骨切りを組み合わせた手術が選択される。

PROFILE

《学歴と職歴》

平成元年	小倉高等学校卒業
平成７年	九州大学医学部卒業
平成７～９年	九州大学整形外科に入局し、研修
平成９～13年	九州大学大学院医学系研究科（生化学）、医学博士
平成13～16年	米国バーナム研究所留学
平成16～17年	九州大学整形外科
平成17～18年	福岡赤十字病院
平成18～29年	九州大学医学部整形外科　助教・講師
平成29～31年	九州大学人工関節・生体材料学　准教授
平成31年～	九州医療センター 整形外科・リウマチ科　科長、現在に至る

《専門領域》

整形外科（足の外科、リウマチ性疾患、股関節外科）

《学会活動》

日本足の外科学会：評議員、ガイドライン委員会委員長
日本靴医学会：評議員
日本リウマチ学会：評議員、国際委員会委員
日本リウマチの外科学会：評議員

《柔道歴》

中学２年で柔道を始める
小倉高校柔道部（寺西順一先生に師事）
九州大学医学部柔道部
2008年より新原勇三先生に誘われ、柔道救護に従事
2010年　世界ジュニア（モロッコ）帯同
2021年　東京2020に選手用医師として参加
現在　柔道五段　全柔連医科学委員会医科学委員
全日本選抜柔道体重別選手権や金鷲旗の救護に従事